

## ビザンティン時代の古典文献伝承行為と 典礼構造の関係をめぐる一考察

秋山 学

### I

ビザンティン中期、特に「マケドニア朝ルネッサンス」と呼ばれる時期には、コンスタンティノポリス総大司教フォティオス(820-891)やカイサレイアの主府大司教アレタス(850-944)を中心として、古典文化の復興運動が盛んに展開されることになる。彼らの蔵書内容や読書経歴のうちに古典作品が含まれるという点は、それ以前の教父たちに比して著しい特徴となっていて、むしろ後のイタリア・ルネッサンス期に近似した現象を呈している。ただ彼らは聖職者階級にあったため、決して古典古代作品の読書だけに専心していたわけではなく、神学書の渉猟にも余念がなかった。

ビザンティンの聖画像破壊運動期には、ストゥディオス修道院のテオドロス(759-826)を中心とした聖画像擁護が行われる一方、大バシレイオス(330-379)の霊性に基づいた典礼改革が行われた。テオドロス自身は質朴な典礼様式を志したとされるが、その一期あとの時代、すなわちマケドニア朝ルネッサンス期に活躍したビザンティン・フマニストたちは、上述のように古典文献伝承筆写に携わりつつも、自らは聖職者階級にあって典礼生活に生きたのであった。彼らの生きた生の次元とはいかなるものだったのだろうか。

以下、本稿で試みる考察は、それ自体が古典文献伝承史の具体的な事実に関わるものではない。もっとも、文献伝承とそれを支えた修道士たちの生の関連を問おうとする際には最も根源的な事項に属することになる。

本科研の題目は「西洋古典文献の伝承史と中世東西地中海世界の修道制をめぐると実証的研究」である。その意図するところは、特に上述のような人文主義的傾向を帯びた中世のある時期に関して、古典文献の筆写伝承に携わった当事者たちが聖職者や修道士たちであったことを前提とした上で、彼らの日常生活、すなわち聖務日課に基礎づけられた典礼生活において、古典古代の文献と取り組むために割く時間ないし精神性は、いかなる位相から編み出されるかを問う、というものである。その問いに対する一応の回答は、既刊拙著『教父と古典解釈』において提示した<sup>(1)</sup>。それは古典文学を「教養」とし、必須の知識として日々学ぶ、という形とは異なり、あくまでも「異教文化」とし、それを終末論的に受容するというものであったというのが筆者の得た結論である。

拙著の中では、アレタスを中心とするビザンティン時代の聖職者のもつ人文主義的傾向を、基本的には証聖者マクシモス(580-662)的な両意説と、マクシモスにおいて正統的な形で確立される「アポカタスタシス」的終末論の地平から説明した。しかし、彼ら聖職者・修道士の生の中核をなしていた典礼生活およびその構造と人文主義とが、いかなる次元において関連していたのか、という問題は未解決のまま残されることになった。

本稿では、上述のような問題について一定の視野を切り抜くことを目標としたい。本稿でも、その対象となる時期をビザンティンのマケドニア朝を中心とするため、その題目は「ビザンティン時代の古典文献伝承行為と典礼構造の関係をめぐる考察」となる。また考究の手順としては、

1) アレタスの時代における典礼形態を確認するために、9世紀以来今日まで存続している東方典礼の次第をまず素描し、次いでゲルマノス(†733)の著作をもとに、当時のあり方を記述する〔以下Ⅱ/Ⅲ〕

2) それより一時期前の著作で、アレタスが読んでいることのできる確かな教父マクシモス・コンフェッソルの典礼神学を確認する〔Ⅳ〕

3) マクシモスとの対比のもとにゲルマノスの特質を措定し、ビザンティン典礼の標準的意味づけを提示する〔Ⅴ〕

4) すでに明らかになっているアレタスの神学的位相と古典観をもとに、彼の時課理解

の中での古典の置かれる場を推定する〔VI〕

では以下の章で、上記1)～4)の考察を進めてゆくことにしたい。

## II

まず、ビザンティン典礼の史的展開を概観するために、クリュソストモス典礼による聖体礼儀の一般的・基本的構造の概略を示しておこう<sup>(3)</sup>。なお以下、各儀礼部分が象徴的に意味するところは、

1. 奉献礼儀…キリストの誕生から洗礼まで
  2. 啓蒙者礼儀…キリストの洗礼からの宣教生活
  3. 信者礼儀…キリストの生涯の最後の時期
- であるとされている。

### 1. 奉献礼儀〔概略〕

- a. 1番目の聖パンから羔(こひつじ)という立方体の小片を切り取る
- b. 2番目の聖パンから生神女を記憶して小片を切り取る
- c. 3番目の聖パンから諸聖人を記憶して9個の小片を切り取る
- d. 4番目の聖パンから生者を記憶する小片を切り取る
- e. 5番目の聖パンから死者を記憶する小片を切り取る

### 2. 啓蒙者礼儀

1. 開祭
2. 大連禱
3. 第一アンティフォン〈唱和詞〉
4. 第二アンティフォン
5. 第三アンティフォン…「神のひとり子」(Justinianus I在527-65, 528作)
6. 小聖入〈聖書〉
7. トロバリオン〈讃詞〉とコンタキオン〈小讃詞〉
8. トリスハギオン(「聖なる神」)
9. プロケイメノン
10. 使徒書
11. アレルヤ
12. 福音書
13. 重連禱

### 3. 信者礼儀

14. 信者のための祈り(連禱)
15. 大聖入〈聖体〉／ケルビムの歌(Justinus IIの治世9年目,
16. 奉納の祈り／増連禱 574年の作と伝わる)
17. 平和の接吻・挨拶
18. 信経……A. D. 476年単性説論者アンティキアのペトロス・フルロにより導入と伝わる
19. アナフォラ(奉献文)序唱
20. サンクトゥス(「勝利の讃歌」)
21. 聖体制定句
22. アナムネーシス(「記憶」)
23. エピクレーシス(聖霊の降臨の祈願)
24. 「メガリュナリオン」(生神女のための祈り)
25. 生者と死者のための記憶(ティテュス)
26. 連禱
27. 主禱文(「主の祈り」)
28. 領聖
29. 領聖後の感謝

### 30. 閉祭

ほぼこれが、ビザンティン典礼において、年間の主日を通して最も頻用されるクリュソストモス典礼の式次第である。四旬節等にはバシレイオス典礼が、また受難の水・金曜日には「先備聖体礼儀」すなわちグレゴリオスによる典礼が用いられる。

なお東方の典礼では、この聖体礼儀を含めて、一日のサイクルが祈りの環でできあがっている。夕刻六時より一日が始まり、9時課、晩課、晩堂課（以上、晩の典礼）、夜半課、早課、1時課（以上、朝の典礼）、3時課、6時課、および聖体礼儀（以上、昼の典礼）がある。各時課にあつては、各々に象徴的に意味付けがなされるものの、『詩編』からの唱和をその骨格とすることに関しては共通している<sup>(4)</sup>。夜六時から始まる一日二十四時間は三時間ごとの八つに区分され、厳密にはそれぞれの時間に祈りを献げる。なお現在では晩課、早課、一時課の三つを選んでこれらを「晩禱」とし、聖体礼儀を行う主日の前晩に行うのが慣例である。

### III

次に、カイサレイアのアレタスの時代に用いられていたであろう式次第をめぐり、コンスタンティノポリスの総大司教を勤めたゲルマノス（在位715-730）の著作『史的教会理解と神秘的観想』（*Historia Ecclesiastica et Contemplatio Mystica*）を通して、その概略を辿っておく。ただしこのゲルマノスのテキストに関しては校訂上問題がある。いわゆる「ゲルマノス」の作として伝わるこの著作のテキストには、後世の別の手になる数多くの加筆がなされたことが明らかとなっており、写本伝承も多様で複雑を極める。

ちょうどアレタスが活躍するのに先立つ時期、フォティオス論争の喧しい時期に、「司書」の名で知られる博学の学者アナスタシウス（810-880；後の対立教皇アナスタシウスⅢ世）が、コンスタンティノポリスに滞在中（869-870）、マクシモス・コンフェッソル、およびゲルマノス作として伝わる典礼注解、それにコンスタンティノポリスの第四公会議（869-870）さらにはニカイアの第七回公会議（787）での決議をラテン語に翻訳した（871, 873）。このラテン語訳の一部をJ. B. ピトラ枢機卿（1812-89）が公刊したが<sup>(4)</sup>、その途上で死去、ラテン語訳手写本をS. ペトリデスがつきとめ、全容を明らかにした<sup>(5)</sup>。

F. E. ブライトマン（1856-1932）はこのアナスタシウスによるラテン語訳の原本すなわちゲルマノスのギリシア語原典写本を見出そうと努めたが、不成功に終わっていた。そこで彼は、アナスタシウスによるラテン語訳文からギリシア語原テキストを再構成することに努めた<sup>(6)</sup>。ブライトマンは、この「再構成」テキストの原著者を「バシレイオス」と誤認した。けれどもR. ボルネールは、結局アナスタシウスからゲルマノス原典を再構成しようとしたこのブライトマンによるテキストが、その成立年代をアナスタシウスの時点に合致させようとしていることから最も明快であるという理由で、信頼するに値するという結論に達し、その原著者を「ゲルマノス」と訂正しながらも、著書の中でブライトマンによるテキストに依拠している<sup>(7)</sup>。ゲルマノスの注解は、D. ドゥカス（-1527）によりローマで1526年に初版本が出版され、モレルによりパリで1560年に、続いてF. デュ・デュク（1558-1624）により同じくパリで1624年に、そしてA. ガルランディ（1709-1779）によりヴェネツィアで1779年に刊行された。この最後の版がミーニュのPG98. 384以下に再録されている。本稿ではブライトマンの「再構成」テキストにしたがい、以下にゲルマノスの著作の概容を掲げておく。

1. 教会とは何か。
2. アプシス（後陣）とは。
3. 聖なる食卓とは。
4. キブリオン（天蓋）とは何か。
5. 祭壇とは。
6. なぜペーマと呼ばれるのか。

7. 何故コスミテース(=εὐχαριστία) と呼ばれるのか。
8. なにゆえ「柵」と呼ばれるのか。
9. アンボーンは何の像か。
10. 何故東を向いて祈るのか。
11. 何故主日には膝を屈めないのか。
12. 聖霊降臨祭まで膝を屈めない理由。
13. 髪を剃るのは何のためか。
14. 司祭のストラについて。
15. 司祭が帯を締める理由。
16. 上級聖品の司祭の数。
17. 祭衣の締め紐について。
18. 脇の締め紐について。
19. 帯は何の「型」(typos) か。
20. 巾広帯は何の「型」か。
21. 修道者について。
22. 何のために頭を丸めるのか。
23. 肩掛け麻布について。
24. フードについて。
25. 肩衣について。
26. 帯を締めること。
27. サンドル。
28. 聖パンは何を表すのか。
29. 何のために聖パンは聖戈で切り取られるのか。
- 31a. ぶどう酒と水について。
30. パンと杯について。
- 31b. 司祭が助祭・輔祭から聖パンを受けること。  
.....
32. アンティフォンについて。
33. 聖入について。
34. トリスハギオンについて。
35. アンボーンから詩編を歌うこと。
36. 高座について。
37. 「汝の霊にも」の意味。
38. 腰掛けること。
39. プロケイメノンについて。
40. 使徒書について。
41. アレルイヤは何を意味するか。
42. 献香について。
43. 聖なる福音について。
44. 福音書が四つあることについて。
45. 司祭が民に十字を切ることについて。
46. 啓蒙者について。  
.....
47. 被い布は何を意味するか。
48. 犠牲奉納の準備について。
49. 「ケルビムの歌」について。
50. [別解]
52. 聖盆について。

- 53. 杯は何の型か。
- 54. 聖盆を覆う被いについて。
- 54a. 大気(7-エル)は何を示すか。
- 55. 霊的な歌について。
- 56. 扉の閉鎖。
- 57. 信経。
- 58. キリストの十字架刑、生命の埋葬、墓の封印、石の転がし。
- 54b. 垂れ幕について。
- 59. 司祭が進み出ること。
- 60. 扇ぎ、および助祭について。
- 61. 信における一致、聖霊の共有。
- 62. 「聖なる方はただ一人」について。
- 63. 神秘的な神秘への参与がコイノーニアと呼ばれる理由。

上表は二本の境界線……で区切られているが、それらをはさみ、第一部が奉獻礼儀その他に関する観想、第二部は啓蒙者礼儀、第三部は信者礼儀の注解にそれぞれ該当している。このことから明らかなように、9世紀後半に流布していた「ゲルマノス」のテキストが、すでに今日のビザンティン典礼の式次第にほぼ等しい構造を成していたのである。

以下、このゲルマノスのテキストの中から、いくつか興味深い箇所を訳出しておくことにする。ゲルマノスの著作は、これ以降のビザンティンの象徴的典礼理解をほぼ規定することになるが、その傾向を顕著に表す箇所としては次のような部分が挙げられよう。

47 「被い布(heilēton)は、キリストの遺体が〈ヨセフとニコデモによって〉十字架から取り下ろされ、墓におさめられたときの布を表している」

48 「祭具室においてなされる奉納準備(※当時は祭品は別室にあった)は、キリストが十字架に懸けられた〈されこうべ〉という場所を表している。主が十字架につけられた場所は墓から遠くなかった」

49 「助祭の行列、およびセラフィムの像を描く扇ぎの表象(historia)を通して、ケルビムの歌は、聖人たちおよびすべての義しき人々が、神秘的いけにえに向かって歩む偉大なるキリストの前を不可視的な仕方で行きながら、ケルビムの力、天使の軍勢の前に集いつつ入る様を表す。」

54 「聖盆を覆う「被い」(diskokalymma)は、墓の中で主の頭をくるんでいた覆いの代わりをなす」

54a 「掛け物(katapetasma)ないしアーエールは、ヨセフが墓の前に転がしておいた、ないし、ピラトの番兵が封じておいた石を表すものであり、かつそう言われている」

また、典礼の本質を構成する二つの部分、すなわち小聖入と大聖入に関しては、次のような理解が提示されている。

33 「福音の聖入は、神の子がこの世に現れ入られたことを表している」

43 「聖なる福音は、神の顕現を表す。そこにおいて主は、もはやかつてモーセに対して雲を通して謎をもって語られたようではなく、われわれに見られる者となり、公然と、真の人間として見られる。……われわれは主に耳を傾け、われわれ自身の目をもって、彼が神の知恵であり言葉であることを見た。それゆえわれわれは皆「主よあなたに栄光」と叫ぶ」……………以上小聖入

50 「またこれ(ケルビムの歌に伴われた助祭の行列)は、キリストの葬りをも模している。ちょうど(アリマタヤの)ヨセフが遺体を十字架から取りおろし、それを浄らかな亜麻布でくるみ、乳香と没薬を添えて、ニコデモと共に運び、岩から切り出した新しい墓に埋めたように。祭壇は聖なる墓のかたどり(antitypos)である。すなわちその上に、咎なき至聖なる聖体が置かれる聖なる卓なのである」

58 「司祭は天使の軍勢とともに歩み寄る。地上の者としてではなく、あたかも天上

の至聖所にいる者のように、神の玉座の祭壇の前に立つ。彼は、この偉大なる表現しがたい神秘を観想する(theorei)。彼は恵みを告げ、復活を知らせ、聖なる三位一体の信を徴す」。……………以上大聖入

あるいは、小聖入から大聖入に移行する際の「扉の閉鎖」は次のように理解されている。この点は後で掲げるマクシモスの解釈を全くそのまま受け継いだものである。

56 「神の聖なる教会の扉が閉鎖されることは、質料的なものの過ぎ去りと……思惟界への歩み入りが行われることを表している」(cf. Maximus, infra.)

ゲルマノスは、福音の朗読(小聖入)を「言葉」としてのキリストの到来に重ねる一方、秘義の制定(大聖入)を、救い主による自らの奉獻をかたどったものとする理解を示している。これは今日に至るまで、ビザンティン典礼による聖入理解の伝統的な考え方をなすものである。

#### IV

次に、ゲルマノスより半〜一世紀遡った頃のマクシモス・コンフェッソルによる『奉神礼の奥義入門』(Mystagogia)の内容を、同じく小見出しを辿って記しておこう<sup>(8)</sup>。

1. 何故またいかにして、聖なる教会は、神の似像また予型と呼ばれるのか。
2. 何故またいかにして、神の聖なる教会は、見える実体見えざる実体から成立している宇宙の似像であるのか。
3. 神の聖なる教会は、単に感覚しうる世界の似像に留まるということ。
4. 何故またいかにして、神の聖なる教会は、象徴的に人間を像化し、また教会は人間より人間として像化されるのか。
5. 神の聖なる教会は、何故またいかにして、それ自体として思惟される靈魂の似像また予型と呼ばれるのか。
6. 聖なる書は、何故またいかにして、人間であると言われるのか。
7. 何故世界は人間と呼ばれ、またいかにして人間であると言われるのか。
8. 聖なるツナクシス(=イカリステイ)の入堂とそれに続くことどもは、何の象徴であるのか。
9. 民による神の聖なる教会の中への入堂は、何を明らかにする意義を有しているか。
10. 神的な読誦は何の象徴であるのか。
11. 神的な歌は、何の象徴であるのか。
12. 平和の呼びかけは何を意味するか。
13. 聖なる福音の神的な朗読およびその後の神秘的なことがらには、各々のことに関して特に何の象徴であるのか。
14. 聖なる福音の神的な朗読は、何の象徴でありまた何の総括的意味であるのか。
15. 聖なる福音の後で行われる聖なる教会の扉の閉鎖は、何の象徴であるのか。
16. 聖なる神秘(mystērion)の入堂は何を意味しているのか。
17. 神的な接吻は何の象徴か。
18. 信の聖なる宣言は、何を意味しているのか。
19. 三度の「聖なるかな」の栄誦は何を意味するか。
20. 「天にましますわれらの父よ」という聖なる祈りは、何の象徴か。
21. 神秘的な聖務において、歌われる聖歌の末尾、すなわち「聖なる者はただ一人、聖なる方はただ主のみ」は何を意味するか。
22. それ自体として思惟される靈魂が、語られたことどもを通じ、各々のことに関して個々に神化し完全なものとする状態が、何故また如何にして観想されるのか。
23. 聖なるエウカリスティアの最初の入堂は、靈魂に関する徳の象徴であること。
24. 聖なる靈の維持する恩寵は、聖なるエウカリスティアによって信者また信心深く集った人々のうちに完成された掟を通して、いかなる神秘を生み出しました完成するものか。

マクシモスの注解は、典礼の本質に関わる部分に限定した、非常に思弁性の高い解説と

なっていることが注目される。この点は先述のゲルマノスが、聖器物や司祭の衣などにまで象徴的理解を施しているのとは対照的で、マクシモスの本領を感じさせる結果となっている。以下、マクシモスによる典礼理解のなかで注目される箇所を訳出するが、特に小聖入と大聖入の理解においてゲルマノスのものとは著しく異なっている。

まず小聖入について。

14 「一般的には、それはこの世の終末（完成）を意味している。なぜなら聖なる福音の朗読の後、司祭は高座から降り、啓蒙者および示されるべき神秘の神秘的な観想に値しない者どもは、司式者たちによって解散退去させられるからである。これにより真理を表し前もって示している(protypousa)わけで、(天の)王国の福音が全世界にわたりすべての民に証しされたのち、その時終末が来ると記されていることは、その真理の像また型(typos)となっているのである」

また 15 「聖なる福音の至聖なる朗読ののち、啓蒙者の退去と神の聖なる教会の扉が閉鎖されることは、質料的なものの過ぎ去りと... 思惟界への歩み入りが行われることを表している」は、上述のゲルマノスがそのまま借用している部分である。

大聖入に関しては、マクシモスは次のように記している。

16 「聖にして畏怖すべき神秘の入堂は、天において行われるべき、われわれに対する神の経綸に関する新しき教えの端緒にして序詞、また神の隠された至聖所で行われるわれわれの救いの神秘の開示となっている。なぜなら神にしてロゴスである方は、自らの弟子たちに向かって〈わが父の王国であなた方とともに新たに飲むその日までは、ぶどうの実から作ったものを決して飲むことはない〉と言っているからである」

以上のように、マクシモスとゲルマノスの相違点で特に注目されるのは、マクシモスにあっては福音朗読の後、高座より司祭が降りることが、キリストの再臨・第二の到来を表すとされているのに対して、ゲルマノスは現行の解釈に近く、それが地上にキリストが降り立ったことを表すとしている点である。またマクシモスにおいては、いわゆる「小聖入」と「大聖入」が、いずれもキリストの再臨・天国の実現に近い形で捉えられているのに対し、ゲルマノスでは後者がキリストの犠牲的受難をかたどるという観点から、全体としてキリストの地上での生に立脚した解釈がなされていると言えよう<sup>(9)</sup>。

## V

以上をもってゲルマノスの注解が有する特質が浮き彫りになったと考える。その際に考慮しておかねばならないのは、モプスエスティアのテオドロス(350-428)による典礼理解の影響である。テオドロスは553年の第二コンスタンティノポリス公会議に至る過程で、いわゆる「三章」により異端宣告を受け、焚書の憂き目に逢った人物である。『教理教育講話』は、近代まで書名のみ知られていて、ギリシア語原テキストが失われたとされているものであった。ところがこの全16講話のシリア語訳が、20世紀になってはじめて中東で発見され、1933年に公刊された。

この『講話』は第11講話が「主の祈り」について、第12～14講話が「洗礼について」、第15～16講話が「聖体礼儀について」を収めている。テオドロスは392年にモプスエスティアの司教に叙階されるまでの10年間、アンティオケイア教会の司祭であり、この講話はおそらくその間に、アンティオケイアで連続して行われた説教だと考えられている。特に最後の二講話は、古代アンティオケイアにおける典礼形態と、アンティオケイア学派による典礼理解への示唆を与えるため、一躍脚光を浴びることとなった。シリア語写本の写真版とフランス語訳とを対頁にしたR. Tonneau/R. Devreesse のテキスト<sup>(10)</sup>により、シリア語訳原版と優れた訳文に接することができる。

以下に掲げるのは、テオドロスがゲルマノスに直接影響を与えたと考えられるいくつかの箇所である。

Hom. 15-Syn. 「新しい契約の大祭司(司祭)の勤めは、この新しい契約の本質を明らかにする犠牲を提供することにある。われわれは、いま祭壇傍に立つ司教が、この大祭司

の勤めを果たしていること、そして、言わば不可視の諸力の典礼を、助祭たちがかたどっているということを感じねばならない(T-D. 461fin. -463. 6=f. 122r. l. 13-125r. l. 17)。... われわれはキリストが今や、受難の場に引かれていくのを見なければならぬ。そしてさらにこの方が、われわれのために屠られるべく祭壇の上で磔にされているのを見なければならぬ。これこそ、助祭たちが祭壇の上に布を懸ける一方、... 他の助祭がもう一方の側立って聖体に扇ぎ風を送る理由である」(T-D. 463. 6-15/f. 126v. l. 16-127r. l. 25).

Hom. 15-25/26「25」かたどり(typos)を通して、われわれは今や受難へと引き立てられ歩み行くキリストを見なければならぬ。彼はこの機にあって、われわれのために祭壇に据えられているのである。そして献げられつつある備え物が聖なる器に入れて示されたなら、主キリストが来たり、不可視の軍勢を従えて受難に向かうのだと考えねばならぬ。... 26)そして司祭はそれを壇上に据えるとき、受難を十全に表すために聖なる祭壇に置くのである。こうしてわれわれは、司祭がそれを壇上に置くのが、すでに受難を経たものを葬りの意味においてであると考えることができる。これこそ、助祭たちが、埋葬のための布のかたどりである被いを祭壇に敷く理由である」(T-D. 503. 17-505. 25=f. 126v-1271).

Hom. 15-29「また祭壇上に備え物が、言わば死後の埋葬のような形で置かれるのを目にするとき、大いなる沈黙が訪れる。ここで行われつつあることは畏れ多きことであるから、記憶と畏れのうちに見守らねばならないのである。この典礼によって、いまや主キリストが復活し、明状しがたい恵みのうちに、すべてそこに与る者たちに(それを)告げるのは相応しい。われわれはこうして、奉納において主の死を思い起こす。なぜならそれは復活と、言葉に尽くせぬ恵みを明らかにするからである」(T-D. 511. 1-13=f. 128r).

このように、ゲルマノスがマクシモスから離れてキリストの史的受難をかたどると理解していた大聖入の部分に関しては、それがアンティオケイア学派に属するテオドロスに遡るものであることが明らかとなる。R. F. タフトは「(テオドロスにおいて) 史上はじめて、感謝の典礼が、復活の記憶・キリストの埋葬の行列としての奉納行列として捉えられている」とする<sup>(11)</sup>。ゲルマノスではこのような大聖入理解から遡って、小聖入の理解もマクシモスとは異なったものとならざるを得なかったと考えられる。

テオドロスは聖書釈義者として知られ、その際に‘typology’ (予型論)の方法を確立することによって、安易なシンボリズムとアレゴリー解釈に流れる危険を孕んだアレクサンドレイア学派とは対決し、字義的・歴史的解釈を展開した。典礼をめぐる彼の解釈は、旧約／新約＝予型／成就という連関のうちになされるものでは必ずしもなく、典礼の諸象徴のうちにキリストの地上での生を読み込む解釈となっていて、「予型論」のニュアンスを若干異にする。だが史実に基づく実証的なその姿勢には変わりがなく、アンティオケイア学派の典礼理解を十分にわれわれに示してくれている。

## VI

上でマクシモス・コンフェッソル～ゲルマノス間の典礼の性格の変化を辿った。もう一度まとめておくと、ゲルマノスは、聖体礼儀の構造だけでなく、教会建築・服装・聖器物にも象徴的解釈を加えることで、純観想的な解釈に徹したマクシモスに拠りつつも、典礼の象徴解釈をあらゆる場面へと拡充させた。このことは、一面においてマクシモスの秀逸さを際立たせる結果となった。けれどもそれと同時に、ゲルマノスがテオドロスに認められるアンティオケイア学派的な歴史認識に基づいた典礼理解をも十全に消化したことにより、ビザンティン典礼が、アレクサンドレイア学派以来の宇宙的な象徴的典礼として存続するとともに、アンティオケイア学派のヒストリア理解をも盛り込んだものとなる道を開くことになった。それは、聖画像破壊運動の時期(第1期726-787;第2期813-843)を経過したために、質料擁護の立場から、アンティオケイア学派による史実に根ざした典礼理解が、かえって一層強く取り込まれたことによるものであった。

以上をもとにして、ゲルマノスよりさらに2世紀ほど後、アレタスの頃の典礼生活に則した古典学の位相を明らかにすることに努めよう。まず、アレタスにあってはマクシモス



やゲルマノスなどとは異なり、彼の生のうちに古典古代作品との関わりがあり、これはフォティオス以来の人文主義的伝統だと言える。その際、異教文献が彼らのうちに位置づけられる位相を象徴的に表すことを予期させる要因として考えられるのは、次に挙げる諸点であろう。

① 「信者の礼儀」における啓蒙者の退去

② 小聖入が福音すなわち「言葉」のレベルでの救い主の到来を、一方大聖入がキリストによる救いの神秘としての聖体の秘義を表すことから、この「小～大」の連関を辿りうるであろうこと

③ キリストの十字架刑が万人の救いを目的とし、大聖入がこの十字架刑に向かうキリストの道行を表す、と解されること

異教文献の位相を推測するに先立ち、参考になるのが典礼における旧約聖書理解の位置である。ビザンティン典礼では、『詩編』の唱和を除いて旧約の朗読は形式的には存在しないため、いわばその国々固有の伝統的文化（すなわち「古典」）を「旧約」の意味付けにおいて典礼の中に取り込むことができるとも考えられる（この点は、オリエント系諸典礼の様相を一瞥すればさらに明らかとなる）。一方旧約聖書が『詩編』に集約されると解するならば、『詩編』の中から歌唱がなされる部分、すなわちアンティフォン（唱和詞）部が旧約の位相を象徴することになるだろう。これはもちろん「小聖入」よりも以前に置かれる。

さらにビザンティン典礼は、奉獻礼儀を啓蒙者礼儀・信者礼儀の前に行いながら、これら全体がイエスの誕生から最期までを描きだす構成になっているために、すべてがキリストの生涯と受難・十字架刑と死・復活へと収斂する仕組みとなっているのである。

ちなみに教父文書に関しては、「ヨアンネス・クリュソストモス典礼」（あるいは「パシレイオス典礼」）という典文名が象徴しているように、ここで行われている言語行為そのものが——典文そのものが実際に教父たちに遡るかどうかは問わず——、教父たちの遺産を集大成したものであることから、聖務の式次第全体を組織立てる意味を持つ。

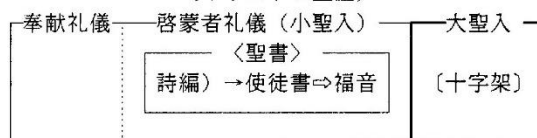
以上を勘案し、さらに聖体礼儀以外の時課の性格をも含めて総括的に考えるならば、以下のように図示することが可能であろう。

〔古典筆写・注解〕

⇒〔聖務・時課〕（＝『詩編』（旧約））

⇒〔奉神礼〕

（キリストの生涯）



~~~~~〔教父〕（システム=世界観として）~~~~~

ほぼ上掲図のような構造で理解される形において、人文主義聖職者たちの生は規定され、その精神性が形成されていたと推測してよいだろう。奉獻礼儀をも含めた奉神礼の全体はキリストの生涯をたどり、大聖入にかたどられるキリストの十字架刑に極まる。従って、奉神礼以外の聖務・時課が総じて旧約の朗誦で構成されていることは、すべて十字架上の犠牲を受け入れるための「予型」的な意味において捉えられる。またそのような時課ごとの旧約朗読を、言わばさらに各文化圏での「予型」的な役割において準備するものとして、人文主義聖職者の場合には古典古代作品の読書が置かれたと思われる。つまり、「古典筆写・注解」と記した箇所は、聖務の上では「〔聖務・時課〕」と記した領域の間に当然割り込んできたと考えられるが、そのような知的活動を括り聖化する役割を帯びるものとし

て、旧約聖書『詩編』の唱和があったと理解してよかろう。「ギリシア古典」のなかで中心的な位置を占めるのがまず詩人ホメロスであったと考えるならば、このような位置づけは一層理解が容易となる。かくしてそれ以外の古典、例えば弁論家たち（デモステネスなど）は説教形式の整備に役立ち、哲学（プラトン、アリストテレス）は世界観の構築と自己統御に貢献し、古代史（ヘロドトス、トゥキュディデスなど）は教会史理解のための礎石となる、といった各々の意味付けも可能となり、聖職者による人文主義的活動が意味あるものとして体系化されうるのである。さらにこの図は、ゲルマノスやアレタスのように、現行の典礼にほぼ近い形で典礼形態が整備された時期以降に該当するばかりでなく、ある意味ではアレクサンドレイアのクレメンス(150-215)など、人文主義的傾向を示した初期教父たちの精神構造にも当てはめることができよう。例えば初期キリスト教時代において特徴的な「ギリシア哲学ユダヤ起源説」は、大聖入の時点から見た場合の距離がより近い方を「本質」、外側にあるものを「借用」と判断した場合に現れる教説だとも考えられるのである。

アレタスにあっては、拙著で強調したように、確かにアポカスタス論が認められ、また彼自身がマクシモスの読書体験を持っていることが実証されるため、彼にはマクシモス的な理解を示す点があったと言える。けれども古典学は、聖画像擁護・典礼における史的イエス理解の重視・草書体の開発による「写字行為」の推進等々と並んで、やはり質料的・人間的レベルに根ざした学的営為であることには違いが無い。したがって、この分野での活動を行う上では、やはり本稿で見たようなアンティオケイア学派的な史的キリスト理解、受難の史実に重心を置いた神学が提示されていることが望ましいのである。

以上、本稿における考察によって、ビザンティン時代における聖職者たちによる人文主義的活動が、観想的・脱歴史的な営為としてではなく、史的受難のキリストと十字架の像のうちに収斂して行くような世界理解のなかに、その知的成立基盤を見出したことを明らかにできたと考えたい。

注.

1)秋山学『教父と古典解釈—予型論の射程—』（創文社、2001年）。

2)cf. F. E. Brightman, Liturgies Eastern and Western, I: Eastern Liturgies, Oxford 1896; C. Kucharek, The Byzantine-Slav Liturgy of St. John Chrysostom, Allendale 1971.

3)R. F. Taft, The Liturgy of the Hours in East and West, Collegeville 1985, 273-91.

4)J. B. Pitra, Juris ecclesiastici graec. historia et monumenta ii, Paris 1868.

5)S. Petrides, 'Traité liturgiques de saint Maxime et de saint Germain traduits par Anastase le Bibliothécaire', in: Revue de l'Orient chrétien 10(1905), 289-313, 350-363.

6)Brightman, 'The Historia Mystagogica and other Greek Commentaries on the Byzantine Liturgy', in: The Journal of Theological Studies 9(1908), 248-267, 387-397.

7)R. Bornert, Les commentaires byzantines de la Divine Liturgie du VIIe au XVe siècle, Paris 1966, 125-130.

8)テキストはR. Cantarella(ed., tr.), S. Massimo Confessore: La mistagogia ed altri scritti, Firenze 1931, 英訳はG. C. Berthold(tr., notes), Maximus Confessor: Selected Writings, New York 1985 を参照。

9)この点に関しては、R. F. Taft, 'The Liturgy of the Great Church: An initial synthesis of structure and interpretation on the eve of Iconoclasm', in: Dumbarton Oaks Papers 34-35, 1980-81, 45-75)を参照。

10)R. Tonneau/R. Devreesse(edd./trad.), Les Homélie Catéchétiques de Théodore de Mopsueste: Reproduction phototypique du Ms. Mingana Syr. 561(Selly Oak Colleges' Library, Birmingham)<Studi e Testi 145>, Città del Vaticano 1949.

11)R. F. Taft, The Great Entrance(2d. ed.), Roma 1978, 37.